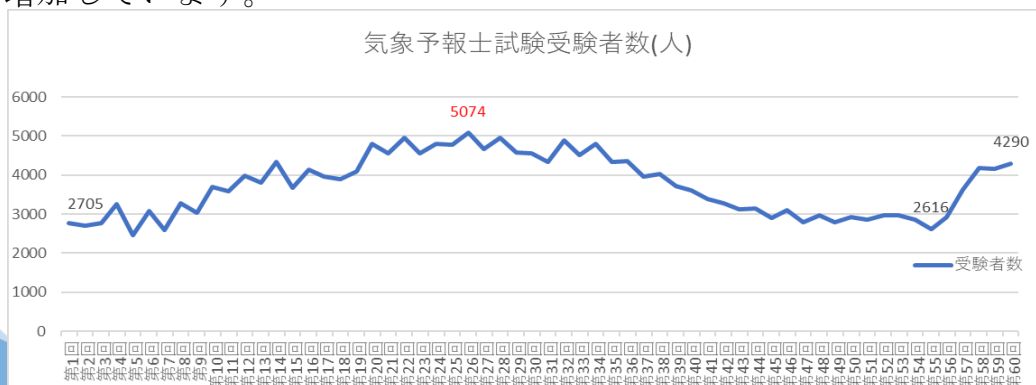


「気象予報士になりたい男」

【第23回】気象予報士になりたい男

読者の皆様初めまして。「気象の杜」をご覧ください誠にありがとうございます。私は那覇基地にて勤務する気象予報士を目指す者です。突然ですが、皆さんは気象予報士という資格に対してどのようなイメージを持っているでしょうか？ 気象庁のホームページによると、気象予報士制度とは“防災情報と密接な関連を持つ気象情報が、不適切に流されることにより、社会に混乱を引き起こすことのないよう、気象庁から提供される数値予報等高度な予測データを、適切に利用できる技術者を確保することを目的として、創設されたもの”と書かれています。このことから、気象予報士には現象を予想するという側面の他に、気象庁の提供する資料を適切に読み取り、解説できることが求められていると言えます。航空自衛隊の気象幹部は気象予報士資格を取得するように求められておりますが、難関資格なので、初級幹部の登竜門となっています。そこで今回はこの「気象予報士」という資格がこういった資格なのかをご紹介します。

気象予報士試験は平成6年に第1回の試験が実施されて以来、これまで計61回の試験が実施されています。(令和6年2月現在) 気象予報士の資格を持つ者は全国に11,690名(令和5年4月28日現在)おり、航空自衛隊の中にも多くの資格保有者がいます。試験は8月及び1月の年に2回実施され、その合格率は平均約5.5%です。試験の内容はマークシート形式の「予報業務に関する一般知識」、「予報業務に関する専門知識」及び筆記形式の「実技試験」の3つの項目があり、実技試験はⅠとⅡの2つの試験が実施されます。合格の基準は学科試験では15問中正解が11以上、実技試験では70%ですが、難易度によって合格点は変動します。また、実施後に通知されるのは合否のみで、点数や自分の答案の正誤は一切確認することができません。受験資格の制限はなく、学科試験最年少合格者は11歳、最高齢合格者は77歳と幅広い方が受験をしているのも大きな特徴です。受験者数がピークとなった平成18年以降は受験者の減少傾向が続いていましたが、令和3年に放送されたNHK朝ドラの「おかえりモネ」の効果や、気象災害の多い日本において、防災上の重要性が再認識された結果、近年では再び受験者が増加しています。





これまで気象予報士という資格について紹介させていただきましたが、この資格は学歴や文系、理系を問わない努力が実を結ぶ資格だと思います。資格の勉強をしていく過程で、何気なく見ていた天気予報や、日々の天気現象が全く違って見えてくるとても魅力的な資格です。現在私は「気象予報士になりたい男」として日々修行中の身であります。次回このコラムに登場させていただく機会があれば、「気象予報士になった男」として皆さんのお役に立てるお天気豆知識を披露させていただきたいと思います。

出典

気象庁 HP : <https://www.jma.go.jp/jma/index.html>

気象業務支援センターHP : www.jmbsec.or.jp/jp/index.html

